



たいまつ新書 29

山田多賀市

実録小説 北富士物語



著者紹介

山田多賀市（やまだ・たかいち）

1907年（明治40）長野県南安曇郡堀金村（旧三田村）に生る。少年期は尋常小学校4年で中退し、子守奉公をふり出しに大工の徒弟、瓦焼屋の徒弟となる。青年期に入ると農家の雇人、土方、瓦焼職人などで生活し、21歳に至って日本農民組合青年部に加盟、農民解放運動に参加す。官憲の弾圧で数十回以上ブタ箱に入る。肺結核を患い、25歳で文学を志す。戦後は農業技術雑誌の発行、経営、編集長を約10年つとめ、現在70歳ポヤポヤ生きている。（著者記す）

著書に『耕土』『農民』『雑草』などがある。

現住所 甲府市朝日1—1—4

実録小説・北富士物語

たいまつ新書 29（緑）

1977年12月10日 第1刷発行

定価 680円

著 者◎ 山 田 多 賀 市

発 行 者 大 野 進

発 行 所 株式会社 たいまつ社

〒160 東京都新宿区百人町1—23—14

電 話 03—371—1590

振替 東京 4—24362

印 刷・厚 徳 社

＜落丁・乱丁本はおとりかえします＞直接注文の場合、送料当社負担

たいまつ新書 29

実録小説・北富士物語

山田多賀市

たいまつ社

実録小説・北富士物語／目次

第一章 富士桜 6

第二章 血臭富士山麓誌 30

第三章 軍師とゲリラと民衆と 60

第四章 謀略と常山の蛇 91

第五章 自由と革命 119

第六章 軍国主義列車 147

第七章 「入会」民衆と政権 167

第八章 安保条約の正念場 186

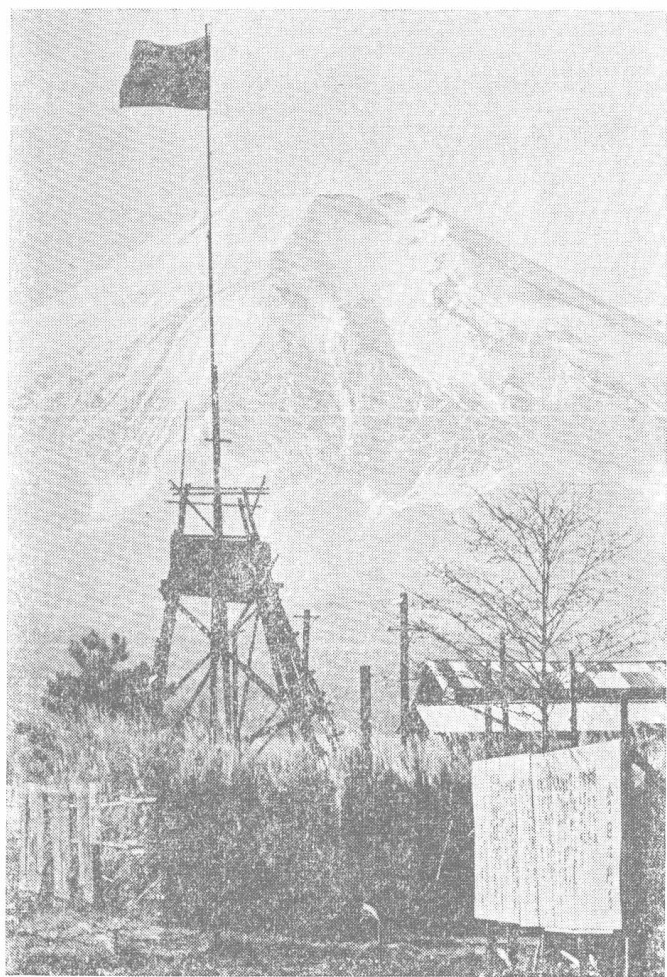
第九章 国際法と国内法 210

第十章 富士の菅笠 235

北富士闘争略年譜 266

後記 268

装丁・井上
宏



北富士闘争・第15の小屋（婦人民主新聞提供）

第一章 富士桜

私の生きている間には、片づかない問題なのかもしれない。が、それでも追及してみよう、せめてそれは、この地に定着した作家の、一つの責任でもある。長い間、心の片隅に引っかかっていたのが、ついに私にそんな決心をさせたのは、若い人々の素朴な行動に心打たれた時からであった。この若い人々は、そのうちに息切れがしてヘタばるかもしれない。もし彼らを主人公に書き進めて行くうちに、彼らがヘタばっても、この文章は書きつづけることが出来る。私はそういう確信も得た。若い人々の素朴な行動は、未知の見はてぬ夢を抱かせるものである。

この若者たちは、東南アジアの大陸に流されている血のいけにえを、怒りをもって受けとめているのだ。それにつながる行為を食いとめようとして、青春のけがれない血をもやして

いる。私の晩年になって出来た、孫にも等しい末娘と同年配の青年と、同じ年頃の娘たちが私の前にいる。みんな二十歳から、それを越えても一つか二つ、首筋には、まだウブ毛が見え、日向くさい艶のよい頬を紅潮させて、議論をたたかわせている。

富士山は平和のシンボルだ、日本のシンボルだ。アメリカが来て富士山麓で演習をし、ベトナム、カンボジアに、その兵を送りこんでいる。これをやめさせなければいけない。それが彼等の議論の中心だ。真剣に人類の行く末に思いをはせ、人が人を殺す行為に怒りをぶつけている若者たちの姿は、世の中の深さを知らない甘いものには違いないが、この年頃で深いものの解る道理はない。問題はこの素朴なヒューマニズムこそが、彼等の人間形成のバネだ、これがどう成長してゆくか、暖かく見護る老人が一人や二人、いてもよいのではあるまいか。

くすぶっていた私の胸の火を、彼らがかきたててくれたのである。彼らの歩みの後ろから、ジャマにならないようにについて行き、彼らがこれからぶつかるのである現実を、細大もろさず記録しておいてやろう。世を達観し白髪を染めて戦場に出て、いさぎよく散った斎藤実盛の故事もあるが、老作家の私は、それとは違う。真剣に体あたりして行く若者たちから嘲笑を受ける結果になるかもしれない。しかし老いさらばえた自分をも含めて、流動する現実を、余さず写し取ることが出来るであろうと自負している。多年に及んで積みあげてきた、

それは私の文章の芸だ。

私が最初にこの問題に心ひかれたのは、朝日新聞のローカル版の記事に、次のような見出しを見た時であった。

……北富士演習場の県有地……国と県との賃貸契約に待った……違法で無効だ……という
初号活字の見出しが出ていた。

中の記事を読んでみると、河西三千子（二十三歳）という、幼稚園の保育が、県当局に対して、住民監査請求を提出した、と、書いてある。

請求の内容は、知事は、演習場内の恩賜県有財産の賃貸契約を、国と結ぼうとしているが、これは地方自治法二三八条の四……①「行政財産の賃貸し禁止」に、違反するもので、しかも同条の四……②の規定で無効だから、契約差止めの措置をしてほしい。

三千子さんが、この請求を出した理由について、こう語っている。「これまで女性の立場から、忍草母の会の人達が、命をかけて富士の大地を守って、権力と闘っているのを感動して見つめてまいりました。

山梨県知事は、自民・社会の共同スイセンで当選する時、北富士の演習場の全面返還、平和利用を公約したのに、アメリカ軍に使わしています。県民に対する公約を裏切っているので許せません」というのである。

私はこの記事を見つめて、ウーム……と、うなっていた。

日中は春めいていて暖かくなつたが、夕方になると寒い。昭和四六年（一九七一）三月十一日の夜であつた。

初春の一夜、新聞記事に心ひかれたが、まもなく町・村会から市県議会、市・町・村長の地方選挙が始まって、朝から晩まで候補者の名前を金切り声でさけんでまわる騒音に巻き込まれて、忘れるともなく忘れていた。

選挙も終つて間もない或る一夜、うなぎ食堂を経営している塚田芳三から呼び出しの電話がかかつてきた。

「人民党を作る、その下相談があるから出て来い……」という、おだやかならぬ電話だ。

うなぎ食堂「愛」のおやじ、塚田芳三という人は、若い頃から血の気の多い人物で、戦前治安維持法違反に問われて入獄した体験もあるし、終戦直後、この地方の共産党を創設したが、十数年以前に中央委員会と意見の対立があつて脱党し、その後は政治運動をはなれて食堂経営をやっている。

彼は昨年あたりから、しきりに「人民党」というものの必要なことを、機会あるごとに力説していた。その人民党を結成する時のメンバーの一人に、塚田の腹案の中では私も加えら

れているらしい。

彼の主張に従うと、一つの例として、東京都知事選挙に、みのべさんが大勝利を収めたことは、社会党と共産党が共同闘争をしただけで勝ったのではない。勿論、社・共の共同は大きな力であったことは認めるが、勝因はそれだけではない。選挙をしたのは人民である。政党はセンデン活動をしたのにしかすぎない。組織されていない人民のエネルギーが、社・共共同に力を合わせたのだ。

その好い例が山梨県にある。県都、甲府市長選挙がそれだ。ここでは社・共は共同をしなかった。共産党は独自の候補を立てて、自民と社会の対決の場に、政党のスジを通すのだと言って割りこんで行った。この前の参議院の補欠選挙の時には、共産党が同じことをやって、自民党を勝たせることができたが、今度の市長選挙では、共産党は自民党を勝たせてやることができなかった。共産党はスジを通して、保証金をボツ収されて落選し、党の弱体性を衆目にさらしたが、社会党スイセンの市長・河口親賀は、丁度、東京都知事選と同じくらい、自民党スイセンの候補に差をつけて勝つことが出来た。

これは社会党スイセンだったから勝ったのではない。社会党も市長スイセンに当って、かなりモタついていた。候補の人柄とその政見に人民が共感したからだ。この場合、既成政党は材料に甘カラの味をそえる役割をはたしているだけだ。本当の味は料理の材料の中味にあ

る。その味は人民なのだ。人民こそがすべての本質だ。人民をわすれた党に、スジも体質もない。党のスジを通すなどということは人民を忘れた政党の独善以外のなものでもない。

共産党が、もし甲府市長選で社・共共闘をしていれば、おおいに内外に共闘の有難さをセーデンできたろうに、バカの一つおぼえでスジを通して、ケツを割った。

共産党はバカだから、ケツを割ったが、これは自民、社会、民社、公明にも同じことが言える。今度ケツを割らなくても、その次には、割る。本当に政治をささえているものが、人民だと言うことを忘れた政党に政治をまかせておくことはできない。政治を人民の手に取りもどさなくてはいけない。今こそ「人民党」の必要な時だ……。

これが塚田芳三の持論である。彼は彼の話に耳をかたむける人を見つけると、彼一流のねばっこい理論を展開して力説する。

私が、かつて、農民解放運動に参加した頃から、塚田より年下の私は、彼を「先輩」と言っているし、彼の心からほとばしる真情には、昔ながらに敬服しているけれども、その限らない長口舌には、いささか辟易^{へきえき}して、ひそかに「塚田イズム」と名付けて、二目も三目もおくことにしている。

今夜の集まりには、若い人達も大勢来るからという塚田の言葉に、なんとなく心ひかれるものがあったて出て行く気になった。

塚田の店の二階が集まりの場にあてられていた。少しおくれで行くと、我が敬愛する雪江雪、竹中英太郎が、十二、三人の若者たちにまじって、テーブルを囲んでいた。彼等二人も私と同じように、塚田に呼び出されてきたのであろう。塚田の腹案では、雪江か竹中のどちらかを人民党の委員長にして、一方を書記長にしたいらしい。ところが雪江も竹中も、人民党などと言ってもひとたび組織すれば、社会、共産、民社、公明と同じになる。人民にハシゴをはずされてしまうよ。人民というものは、それほど甘くはない。社会、共産、民社、公明も、彼等は人民を代表する党だと自負している。自民党でさえ、そう思っている。

「調子づいて、登るのはわけないが、ハシゴをはずされたら、人民の中へ降りてくることは出来んからな……」

若い諸君は、そういう意味で集まっているのではないらしい。塚田が若い諸君の集まりに便乗して、私たち意中の者をよび出したというのが本当のようだ。

若い諸君の顔は私には初めての者ばかりである。塚田の腹づもりでは、この若者たちと私たちをむすびつけることによって、人民党の足場でも求めようというのか、或いは、別の腹案があるのかも知れない。つきつめれば塚田の思想の根本に流れているものは、野心も慾もない、天皇制資本主義をいかにしようにしても、転覆せずにはおかないという夢だ。それが塚田芳三の見はてぬ悲願である。

そんなことを考えながら私は、元氣よく話し合っている若者たちを見つめているうちに、三月初めの一夜、眼にとまった新聞記事に心ひかれたことを思いだした。この若者たちの中に、河西三千子という保母さんのいるのに気がついた。

若者たちの話題は、富士山麓でアメリカ軍の演習することは、監査請求を出したとおり違法であるということについてであった。私は六十年余も生きているが、自治法については何の知識もないので、大きな体を小さくして、諸君の話に耳をかたむけているより他なかった。そうして河西三千子さんという娘の動きを観察していた。二十三歳だそうだが化粧もせず、かざり気のない面長の顔おもなに一重マブタで切れ長の眼が冷静に光っていた。スツと息を吸いこむような、ひかく的早口で、きれいな齒ならびを見せて物を言うのが特徴だ。肥っていない若い鹿のように健康そうな体を、黒味がかったグリーンのセーターと白っぽいズボンで包んでいる。背も高い方である。真面目な物語りのヒロインになれそうな、清潔な感じの娘だ。

同じように清潔な感じの娘が他にも七人いた。みんな化粧らしいものはないが、無造作に着たセーターや背広からのぞいている首筋には、若さがあふれている。こんなけがれを知らない若い人々が、アメリカ軍が富士山麓を演習場に使うのを認める日本政府も県当局も違法である、と、本気になって監査請求を出したのである。

塚田芳三がしきりに、人民党の必要なことをしゃべっている。若者たちは、塚田の声に力

の入った時には、ちょっと口をつぐみ、塚田の声が弱まると、富士の演習場は全部で六千四百九十七ヘクタールある。そのうち県が経営する行政財産の分は三千三百五十六ヘクタールだ。県が使用を禁止すれば、北富士演習場は使用不能になる。そういうことについて話し合っている。

「塚田氏よ、人民党の話はちょっと後にして、諸君の話をきこうじゃないか……」竹中英太郎が塚田の言葉を押えた。

「北富士を守る県民の会の発展のためにも、人民党は必要だぞ……」塚田はなかなか口をつぐまない。

北富士を守る県民の会、というものが、すでにこの若者たちの間で作られているらしい。そういうことが言葉のいきさつから察知されてくる。どうも塚田の人民党の方が、出足が遅れているようだ。

「話を二つ、ませこぜにしてしまっではいかんよ。とにかく若い諸君の話から聞こうじゃないか。どういうことになっているのだ」雪江雪が塚田に言った。

ようやく塚田の長口舌がおさまると、眼鏡をかけた色白の青年が、私たちに向って言った。「北富士を守る県民の会に加盟して下さい」

老人たち三人は顔を見合わせて、ちよつと口ごもっていたが、

「お役に立つならね……どういふことをやるのかね、そして今はどんな段階に進んでいるのかね……」

「北富士を考える会です。みんなで考える会です。今は河西三千子さんを代表にして、県へ監査請求を出しました。当面の段階として、これは一人の若い女性の思いつきではない、みんな同じことを考えているのだという意味で、皆さん大勢に監査請求を出して頂きたいのです。富士山麓をアメリカ軍の軍靴に踏みにじらせるのを阻止するのです。富士山麓の農民の闘いを支援するのです」

「わかった、戦争反対、アジアに平和を、農民に土地を返せ！」

「そうです僕たちは……」

「よろしい、わかった」老人たちは大きくうなずいていた。

「一カ月、会費百円です……」

「大変安いのだね」竹中英太郎が、満足そうにニコニコして言った。

「はあ……」青年はモジモジしていた。

娘たちがプリント印刷した紙を二つに折りたたんでいる。印刷物には河西三千子さんが県へ提出したという、監査請求の文章が印刷されてある。青年はそれを私たちに示して、「これに署名して県へ提出して下さい」と言った。